

# 実習生を指導する経験が保育者自身の保育の質向上に与える効果 — 幼稚園・保育園実習において大学が果たすべき役割を探る —

井口眞美 \*・井上宏子 \*\*・山下晶子 \*\*\*

\* 生活文化学科 幼児教育研究室      \*\* 明星大学 特任教授、実践女子大学 非常勤講師  
\*\*\* 明星大学 特任教授、実践女子大学 非常勤講師

The Effect that Teaching Trainees Has on Improving Quality of Child Early Childhood  
Educators'/Caregivers Work

— Exploring the Role that the University should Play in Training Teachers for Kindergartens  
and Nursery Schools —

Mami IGUCHI \*, Hiroko INOUE\*\*, and Akiko YAMASHITA\*\*\*

\*Department of Life Sciences, Jissen Women's University, \*\*Meisei University, \*\*\*Meisei University

In this paper, we will explain the effect that early childhood educates'/caregivers' experience of teaching trainees has on improving the quality of their own work. This paper also aims to examine the role that the University should play in relation to the training of teachers for kindergartens and nursery schools.

We conducted questionnaires and interviews on "the present conditions of and challenges facing the training in kindergartens and nursery schools" and "the effect of teaching trainees on improving early childhood educates'/caregivers' own work" with teachers at Hino municipal kindergartens and nursery schools.

The outcome was that through teaching trainees, early childhood educates/caregivers are influenced by "the positive attitude of trainee students" and "their approach to engaging with individual children with great care," which gives them an opportunity to review their own work and to find a new awareness of the profession from the journals written by trainee students. Teaching trainees has also increased the number of opportunities for early childhood educates'/caregivers to discuss their work among themselves. In other words, the experience of teaching trainees has a positive effect on improving the early childhood educates'/caregivers' own work.

However, some of the trainee students are not easy to teach, and the early childhood educates/caregivers supervising them are struggling. Against this background, some faculty members of the University participated in the training review sessions and exchanged their opinions with the early childhood educates/caregivers and the trainee students.

Furthermore, the University was asked to play a role in helping the trainees acquire "politeness and good speaking manners," "the ability to utilize teaching materials," and "the necessary perspective for writing training journals and guidance proposals" before they begin training.

Keywords : 保育の質, 実習指導, 保育現場と大学との連携

## 1. はじめに

実践女子大学では、日野市の公立幼稚園、保育園に毎年多くの学生の学外実習を依頼しているが<sup>註)</sup>、幼稚園における教育実習及び保育園における保育実習（以後、両者を併せて「実習」と記す）の受け入れは、保育現場にとって精神的にも時間的にも負担が大きい。そこで、実習指導を担当する保育者の負担をできるだけ軽減するために大学が関与できることは何かを明らかにしたいと考えた。

実習指導は、保育者に負担をかけるものではあるが、実習指導の経験は、保育者が自らの保育を見直す機会となり、保育の質向上に繋がるのではないかと考えている。保育者が、実習指導の機会を自らの保育の質向上に役立てることで、実習指導は、保育者にとっても有益な経験となり得るだろう。

昨今、幼稚園・保育所・認定こども園における保育の方法や内容が多様化し、幼児期にふさわしい保育の在り方が問われている。平成 29 年に告示された新幼稚園教

育要領、新保育所保育指針、新幼保連携型認定こども園教育・保育要領の3法令<sup>1</sup>では、計画→実践→評価→改善というプロセスを大切に、保育の質向上を目指すよう求められている。

保育者は、保育を観察した実習生に対して、「その日の保育の計画と実際」「子どもの育ち」「翌日からの課題や改善点」等について説明をしたり、保育計画を立てて実践に臨んだ実習生に対して、「子どもの取り組みの様子」「保育の評価」「改善点」等を伝えたりする。こういった日々の保育をふり返り他者に伝える行為によって、「計画→実践→評価→改善のプロセス」が意識化され、保育の質向上に重要な意義をもつと考えられる。本研究では、保育者自身が実習指導における保育の質向上に繋がる効果を自覚しているかどうかについても注目したい。

今回、日野市内の公立幼稚園、保育園、大学が協同し、実習指導の現状と、実習指導の経験が保育者の保育の質向上に与える効果についてアンケート、インタビュー等の調査を行った<sup>2</sup>。その結果をふまえ、実習指導の機会が保育者自身の保育の質向上に与える効果と、それを支える大学の役割について考察することを目的とする。また、本研究は、大学研究者が保育現場と連携を図りながら行うアクションリサーチの形態をとっており、ここで得られた成果は、本学の実習指導において実践・検証し、実習指導の改善を図る。

## 2. 調査項目について

### 2-1. 実習指導で重視される内容

本調査では、まず、幼稚園・保育園における実習指導の経験のある保育者が、実習指導上重視している内容、学生に期待する専門性を明らかにする。朝木によれば、実習生が保育現場から求められた専門的技術は「絵本・紙芝居の読み聞かせ」が最も多く、次いで「手遊び、指遊び」であるという<sup>3</sup>。実習での不安因子として「実習態度面の不安」「保育技量面の不安」の2つを挙げる研究もある<sup>4</sup>。実習生は、子どもたち相手に読み聞かせや手遊びを行う場面で与えられるため、実践的な保育技術の修得に意識が向きやすく、実習で求められていると回答する学生が多かったと思われる。

その一方で、指導する保育者側は、どのような内容を重視しているのだろうか。保育実習指導の基準となる「保育実習指導のガイドライン<sup>5</sup>」によれば、保育園の保育実習の内容として、「発達状況や遊び、活動を理解し、さらに一人ひとりに応じた援助や支援を行い、乳幼児理解を深める」「知識・技能を総合的に活用して保育実践を行う」ことが示されている。実習において最も重視されるべき内容は、乳幼児理解である。乳幼児理解を基盤

として、一人一人に応じた援助、知識・技能を総合的に活用した保育実践が可能となる。本研究では、保育者へのアンケート及びインタビューを行い、「保育者が重視している実習内容」について調査する。更に、「実習生に伝えたいこと」という項目を設定し、「(広義の)保育者としての専門性」として何が求められているかを調べることにした。

### 2-2. 実習日誌の記録について

民秋は、保育者が専門性を高め、保育の質を向上させるためには、日常の保育活動一コマ一コマに意味があることに気づくことが大切であるという<sup>6</sup>。平成29年に改定された新しい保育所保育指針においても、「保育の質の向上」のため、「自らの保育をよりの確に把握する視点を持つことが必要である<sup>7</sup>」と明示されている。

実習生は、毎日実習日誌に、その日の保育をふり返り、自分が気づいたこと、印象に残ったエピソードを記載する。保育の基本である「乳幼児理解」に関しても、実際に子どもに接した事例に基づいて、実習生なりの気づきが書かれていることが多い。子どもとの関わりに関しても、保育中、その場では臨機応変に望ましい対応ができなかったが、実習日誌には、「子どもの思いとすれ違っていることに気づいた」「こうすればよかった」と自らの行為を反省する記述等が見られ、実習生が保育をどのように把握しているか、何に気づいているかを把握できる資料といえる。保育者は、学生の作成した実習日誌に目を通し、実習生を理解し指導する手掛かりとしているため、この実習日誌の指導についても調査を行うことにした。

### 2-3. 実習指導における課題

では、保育者が考える実習指導上の困難、課題とは何か。先にも述べたように、実習生は、保育者との関係性といった「実習態度面の不安」と、絵本や手遊び等の「保育技量面の不安」を抱えていることが多く、そのことが実習の挫折経験に結びつきやすい。西坂・森下は、「実習を通して、理想やモデルとなる保育者像と自分自身に対する理解を深め、それらを一致させる<sup>8</sup>」としているが、実習中の挫折経験が保育者への志向性を低下させ、実習態度に表れることすらあるかもしれない。

また、実習日誌に「何を書けばよいかわからない」と悩む実習生もいる<sup>9</sup>。保育を任せられ、慣れない指導案作成や教材準備に手間取る実習生も少なくないだろう。指導する保育者からすれば、こういった実習生を指導する時間的な負担も大きいと考えられる。

保育者は、実習指導において何を負担と感じているのか、また学生の、あるいは実習指導の何が課題と捉えて

いるのかを調査する。その上で、保育者の負担感を軽減する、実習内容を改善する等、大学が関与できる連携の具体的方策について考えていきたい。

#### 2-4. 実習指導の経験が保育の質向上に与える効果

金は、「子どもとの関係を第三者的立場で見ることのできる他の保育者の存在が、保育を共有する保育者の『省察』を深め、自分の保育実践を意味づけるだけではなく、子どもの気持ちに寄り添うことにも繋がる<sup>10)</sup>」と述べる。保育を観察したり、共に保育したりする実習生の存在は、この「省察」を深め合える存在となり得ると考えた。また、この「省察」を深める話し合い(対話)は、「共に悩み共に学ぶ」立場であることが求められるという。保育経験の少ない若手保育者ほど、実習生と対等に近い立場で保育について話し合い、共に学ぶことで、保育の質向上が可能となるであろう。

調査では、保育者が実習指導の機会を自らの保育の改善へと意識的に結びつけて捉えているか、どのような事柄が保育をふり返る機会となったかについてたずねることとする。

#### 2-5. 養成校に伝えたいこと、学生時代に身に付けておくとよいこと

鈴木は、養成校としては実習をお願いしている立場上、指導内容の改善等を依頼しづらいが、養成校が保育現場と連携を図りながら実習を改善することが大切であると論じている<sup>11)</sup>。確かに、大学側は、“あまり口を出さないスタンス”で実習園との関係性を保つ傾向がある。しかし、乳幼児理解のズレ、職員との関係性の難しさ等、実習生が実習中に経験する「リアリティ・ショック(理想と現実とのズレによって、うまくいかない、成果が得られないと感じた時の反応)」は、ネガティブに影響するか、ポジティブに影響するか文脈により両義性をもつという<sup>12)</sup>。それだけに、実習生が「リアリティ・ショック」に直面した際、励ましたり新たな視点を与えてアドバイスしたりしながら実習生を支え、実習経験を前向きに捉えさせることも、大学の大切な役割だといえる。また、保育カンファレンスに参加し、実習生、保育者らと、保育の「省察」を深める場を共有する等、大学が専門的見地から実習指導に関与することも求められるだろう。

今回の「養成校に伝えたいこと」「学生時代に身に付けておくとよいこと」に対する回答から、実習における課題の解決に繋がる連携の具体的方策を明らかにし、今後の実習指導において実践していく。

### 3. 調査について

#### 3-1. 調査方法と内容

##### (1) 幼稚園、保育園の保育者対象のアンケート

①調査対象…実習指導を行っている日野市立幼稚園4園、保育園6園の保育者40名

②調査時期…平成29年12月

③調査内容…「実習生に関するアンケート」

- ・実習態度の指導ポイント
- ・実習期間に学んでほしいこと
- ・実習日誌添削のポイント
- ・実習生を受けもって感じたこと、苦勞したこと、良かったこと、学生時代に身につけておいた方が良かったこと
- ・実習生を受けもったことがきっかけとなり、自らの保育をふり返ったり見直したりした経験
- ・これから保育者になろうと勉強している実習生に、保育者の先輩として伝えたいこと
- ・養成校に伝えたいこと

今回、アンケート内容は、保育現場の声がより反映できるように、保育園長らが中心となって作成した。(対象となる保育者及び日野市役所保育課、学校教育課の同意を得て実施した。)また、分析は、個人が特定されない形で質的データ分析ソフトMaxQDAで行った。

##### (2) 幼稚園、保育園の保育者へのインタビュー

①調査対象…実習指導経験のある日野市立幼稚園4名、保育園3名

- ・幼稚園保育者(経験年数22年、22年、4年、1年)
- ・保育園保育者(経験年数30年、20年、15年)

②調査時期…平成30年1月22日、24日、2月8日

③調査内容…アンケートで得られた結果を踏まえ、実習指導において重視している内容(実習態度、実習日誌、保育者の意図等)と課題、実習指導が自らの保育に与える影響についてたずねた。

#### 3-2. 結果と分析

##### (1) アンケート調査の結果

幼稚園4園、保育園6園の保育者40名へのアンケート結果は以下の通りである。

問1 実習態度の指導ポイントとしていることはどんなことですか。大切にしている順に番号をつけ具体的な内容を記入してください。

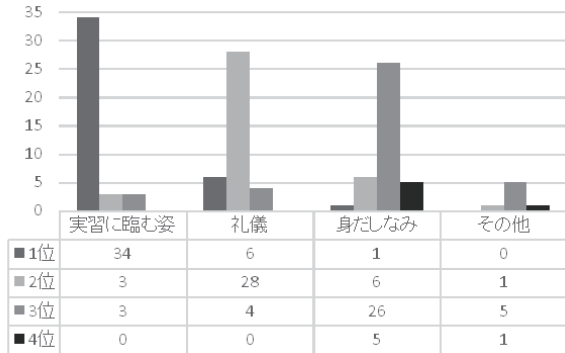


図1 実習態度の指導ポイント

<分析> 図1に示す通り、「実習態度の指導ポイント」として、34名（87.5%）が「実習に臨む姿」を最も大切にしており、次いで「礼儀」「身だしなみ」となっている。実習において、やる気、前向きさといった意欲・態度に関わる内容は、最も重視されていた。ただし、自由記述欄には「保育者になりたいという思いのある学生に来てほしい」「礼儀や社会人としてのマナーは身につけて来てほしい」といった記述も多く、限られた実習期間中に修得する内容ではなく、事前に大学で身につけて来てほしい内容として捉える必要があるだろう。

問2 実習期間に学んでほしいと思うことはどんなことですか。大切にしている順に番号をつけ具体的な内容を記入してください。

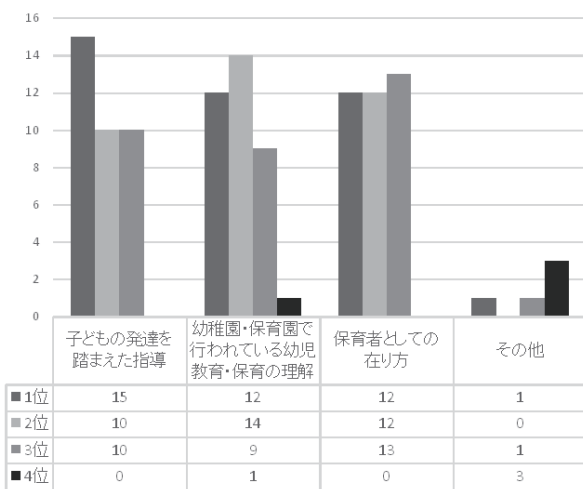


図2 実習期間に学んでほしいこと

<分析> “実習期間に学んでほしいこと”としては、「子どもの発達を踏まえた指導」「幼稚園、保育園で行われている幼児教育、保育の理解」「保育者としての在り方」の順となっているが、その差は小さい。保育の基本原理であるいずれの項目も同様に学んでほしいと考えていることがわかる。(図2参照)

問3 実習日誌の添削のポイントとしていることはどんなことですか。大切にしている順に番号をつけ具体的な内容を記入してください。

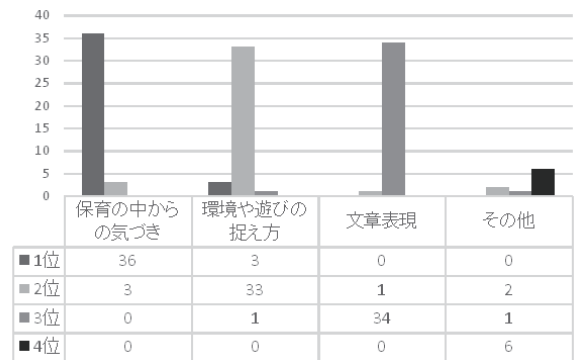


図3 実習日誌の指導のポイント

<分析> “実習日誌の指導のポイント”として、図3の通り、36名（89.7%）が「保育の中からの気づき」を第一に挙げており、次に「環境や遊びの捉え方」が33名と続いている。

問2で、「実習期間に学んでほしいこと」で重視されていた「子どもの発達を踏まえた指導」「幼児教育、保育の理解」等、保育の基本について、保育実践から得られた実習生なりの気づきが指導のポイントとなっていた。

問4 実習生を受けもって感じたことをお書きください。

①苦勞したこと（具体的な対応面、精神的な面、その他）

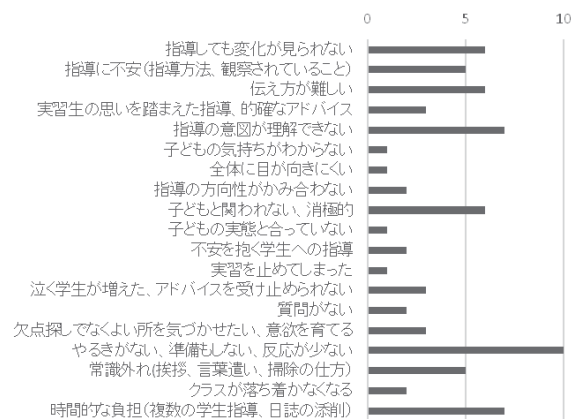


図4-1 実習生を受け持って苦勞したこと

<分析> “実習生を受け持って苦労したこと”として、やる気がない、すぐに泣くといった実習生の意欲・態度に関わる課題や、指導の意図が伝わらない、伝え方が難しい、伝えても変化が見られないといった指導に関わる課題が挙げられていた。その他、子どもと関われない実習生に問題を感じている、指導のための時間的な負担感をもっているといった声もある。

実習指導において、消極的な学生の意欲・態度を高める必要性、指導側の意図を伝えることの難しさが明らかになった。学生個人の課題の解決も必要であるが、実習指導が円滑に進むよう、保育現場に（可能な範囲での）学生の情報を伝える等の手だても求められる。

問4 実習生を受けもって感じたことをお書きください。  
②よかったこと（具体的な対応面、精神的な面、その他）



図4-2 実習指導の意義

<分析> 一方、“受け持ってよかったこと”として、具体的には、自分の保育をふり返る、憧れの保育観、初心を思い出す、子どもを客観的に見ることができるといった効果が挙げられている。他にも、学生への伝え方がわかった時、子どもの見方、発達を踏まえた指導を学生が理解し変化が見られた時に嬉しさを感じていた。

調査した半数の保育者が、子どもの見方に変化が生じる、子どもを客観的に見る、保育をふり返る等、自らの学びがあると述べている。実習指導が保育者自身の保育の質向上に繋がるきっかけや気づきを与えていることがわかる。また、実習指導において保育者に求められる力として、子どもの姿や保育の本質を伝える力が重要であることが見えてくる。

問4 実習生を受けもって感じたことをお書きください。  
③学生時代に身に付けておくことよいこと

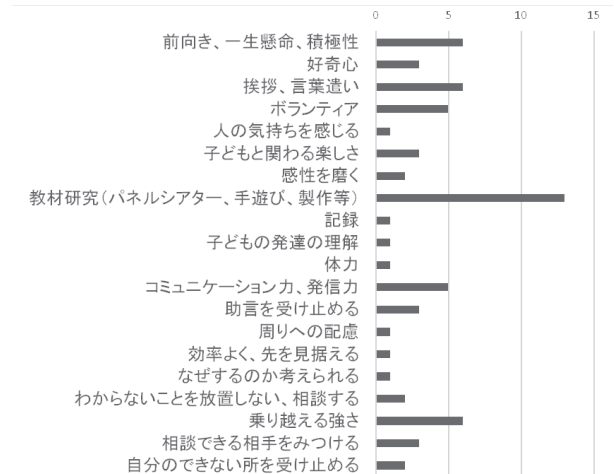


図4-3 学生時代に身に付けておくことよいこと

<分析> “学生時代に身に付けておくことよいこと”をまとめると、教材研究等、保育者としての専門性を高めておくこと、挨拶、積極性等、基本的姿勢の他、他者と関わる力や困難を乗り越える力を備えておくことの大切さが挙げられている。ここで挙げられた「教材研究力」「社会人としての基本的姿勢」に関しては、実習までに大学での獲得が求められているといえよう。

問5 実習生を受けもったことがきっかけとなり、自らの保育をふり返ったり見直したりした経験はありますか。(複数回答可)

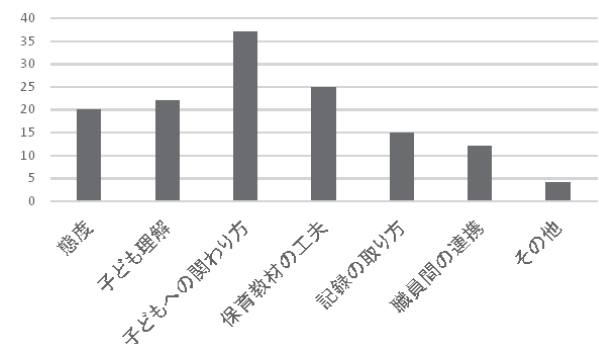


図5-1 自らの保育を振り返った経験

<分析> 図5-1の通り、「実習生を受けもったことがきっかけとなり、自らの保育をふり返ったり見直したりした経験はあるか」の質問に、37名(87.5%)が「子どもへの関わり方」、25名(62.5%)が「保育教材の工夫」、22名(55%)が「子ども理解」を挙げている。ほとんどの保育者が、自らの子どもへの関わり方を見直す、新たな保育教材の知見を得る、自分と異なる視点で記述された実習日誌から新たな気づきを得る等、自分の保育をふり返る機会となっていることが明らかになった。

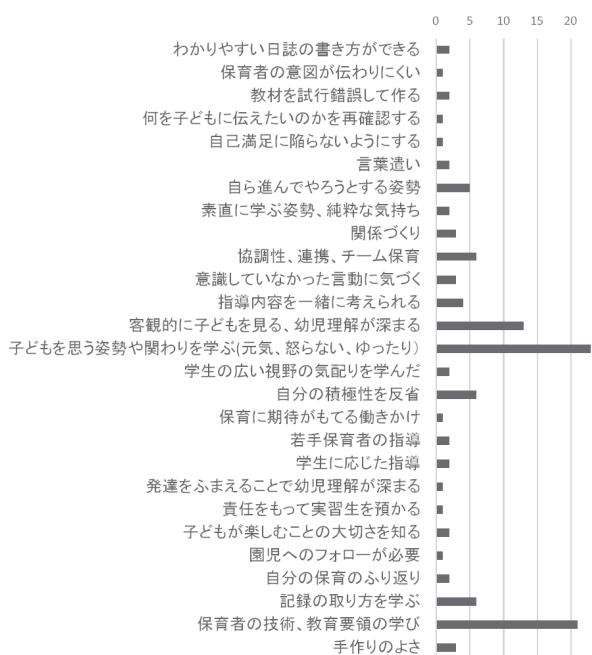


図5-2 自らの保育をふり返った経験（記述）

問5に関して、具体的な記述内容を見てみると、図5-2の通り、実習生が子どもを思う姿勢、元気でゆったりとした、怒らない学生の関わり方から自分を見直した、別の視点で子どもを見とることで幼児理解が深まった、一緒に教材研究をすることで新しい保育技術が獲得できたといった経験が挙げられており、実習指導が保育の質向上に効果があることがわかる。実習を通して保育の内容をふり返るだけでなく、実習の前向きな態度、一人一人の子どもに積極的に関わる姿勢は、保育者としての心構え、モチベーションにも影響を与えている。

問6 実習生に伝えたいこと

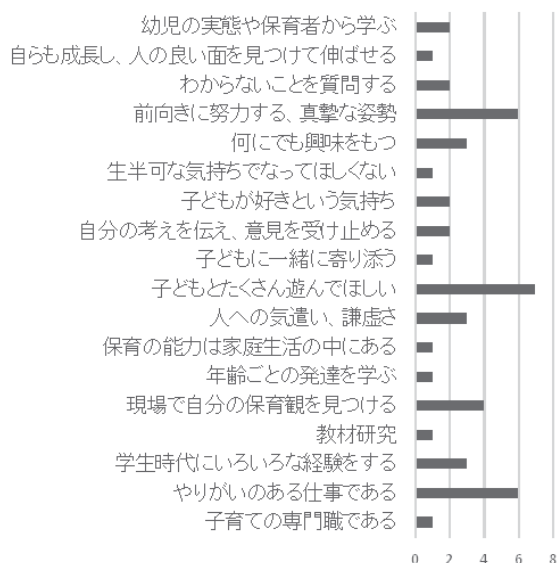


図6 実習生に伝えたいこと

<分析>問4③“学生時代に身に付けておくといふこと”では、教材研究等、具体的な保育技術に言及する回答も多かったが、ここでは、子どもとたくさん遊んでほしい等、人としての育ちという広い意味での保育者の専門性や保育者としての前向きさが求められていた。(図6参照)

問7 養成校に伝えたいこと



図7 養成校に伝えたいこと

<分析>養成校に対し、日誌や指導案の書き方、社会人としてのマナー等の指導が期待されている(図7)。

学生の情報を事前に提供する、保育者が大学で講義する機会を設ける等、現場と大学が連携を図る具体的方策も示されており、実習指導の充実に向けた今後の在り方に示唆を与えていると考えられる。

(2) インタビュー調査の結果

実習を担当した経験のある保育者7名へのインタビューの結果の一部を以下に掲載する。

①実習態度について

- ・実習に園に来た時、実習生をどう見るかということ、子どもに自分から行こうとする態度、また、わからないことを保育者に聞いてくる実習生は評価できる
- ・意欲、目的、ねらいをもっているかが大事
- ・自分から保育者に発信できるかどうかや、話せるかどうかのポイント
- ・挨拶、マナーも大事だが、一生懸命さがあればよい
- ・実習のポイントが明確であると指導しやすい
- ・時間にルーズはだめ
- ・当たり前のことを当たり前に行うことが大事

<分析>保育現場では、学生の実習態度、社会人としてのマナー、そして実習の意欲・一生懸命さが求められている。アンケートでも重視されていたが、大学生生活全般の中で、実習に向けて身に付けるべき態度であるといえる。

## ②実習日誌の記録について

- ・自分も学生の時、たくさん書き、大変だったが、気づきを書いたとき認めてもらった
- ・実習生が自分なりの気づきを書いているとき、すごいなと思ひ線を引き
- ・ポイントを絞って、ポイントを厚くしてほしい
- ・細かいやり取りを記録できるといい
- ・出来事だけ書くのではなく、どういう意味で書いたのか、どうしてそうしたのかの意味に触れているとうれしい

<分析>保育の意図や思いを読みとること、自分なりの気づきが記されていることが求められている。実習日誌の書き方については、事前から指導を積み上げる必要がある。

## ③保育の意図について

- ・子どもへの援助として、すべて助けることが先生の役目ではない。全部とっていいほどやってあげる実習生がいた
- ・ひとりの子どもに連れまわされていたり、反対に子どもにべったりする実習生がいる。子どもとの距離をどうとるか等、子どもへの対応をどうすればいいか考えてほしい、わかりたいときは聞いてほしい
- ・大学で子どもの内面を読み取ることが大事と理論を学んでくると思う。現場で保育者の対応や工夫を、その時その場から学んでもらいたい
- ・そこで手伝ったら自分でやる機会を奪ってしまう等子どもへのかかわり方について、その場で伝えられることはすぐに言った
- ・子どもたちの遊びの中で、その時期、年齢に、経験させたいことがあるということを理解してほしい
- ・保育者の技術力を見ることで、ある程度の基本を大学でも学んでくるが、さらに高めることができるように、これからの学びにつながるとうい

<分析>実習生は、子どもと親しくなろうとするあまり、ややもすると、手を出しすぎてしまい、子どもの自立的な行動を阻むような援助となることもあるのだろう。保育者の対応や工夫を読みとり、実習生も保育の意図を汲んで子どもに関わってほしいと願っていることがわかる。

## ④実習指導の難しさ

- ・相談に来た時に、伝えたことが前向きに返事が返ってきたので伝わったと思っていたら、わかってなかったり、言ってもわかっていませんという態度だったりする実習生がいた
- ・助言、指導に、すぐに泣いてしまう実習生もいる
- ・助言や言っている意図を理解する、また受け止める力は欲しい
- ・少しでも響いてくれればと指導しているが響かない学生もいる

<分析>保育者の意図が伝わらない実習生の指導に難しさを感じている。わかっているそぶりを見せる、すぐに泣いてしまう等、対人関係を苦手とする実習生もいる。実習生の生活を把握している大学教員が、時に学生を支え、時に学生に指導をしながら連携を図ることが大切だと考えられる。

## ⑤自らの保育に役立ったこと

- ・自分を律する。見られているから気を付けることがある。自分を高めることに繋がる
- ・若い学生が持ってくる情報で、一緒に指導案を考えたとき“こうしたらどう”“こうしてみたら”といったとき、その学生が受け止めてくれたことがあった
- ・学生からたくさんの質問があると、子どもたちがこんなこと言っていたのか等の姿が見えて、根本を見直すことができた
- ・実習生を受けもったことで保育を見直すことができた
- ・実習生の子どもの気配りや、子どもとのかかわりから、日ごろ子どもが保育者に見せない姿や、子どもを客観的に見ることができた
- ・若い人の考え方が分かった
- ・実習生は新鮮だ
- ・実習生からの質問等で、保護者からもこんな見方をされているのかと思い、保育を見直せた

<分析>実習指導を通して、保育のふり返りができていることがわかる。特に、積極的に質問したり、相談を持ちかけたりすることから、話し合いが深まり、保育の省察に繋がるようだ。実習生は、「自分の幼児理解は間違っているかもしれない」と意見を言うことを躊躇しやすいが、保育者としては、自分が気づけなかったこと、自分と違った新鮮な見方を知らされたことが、保育のふり返りに役立っている。

特に、若手保育者は、ベテラン保育者よりも、実習指導を自らの保育の見直しに役立てている傾向が見られた。

## 4. 考察

### 4-1. 実習指導が保育の質向上に与える効果

#### (1) 保育を言語化し、省察を行う機会となる

アンケートの質問項目「実習生を受けもったことがきっかけとなり、自らの保育をふり返ったり見直したりした経験はあるか」に対する、「子どもへの関わり方(87.5%)」、「保育教材の工夫(62.5%)」、「子ども理解(55%)」等の回答からも、保育者は、実習指導を通して様々な視点から保育の省察を行っていることがわかる。

保育者は、保育の意図、子どもの発達段階や経験等について実習生に説明する必要がある。保育を自己評価し、言語化する経験が、保育の質向上に繋がると考えられる。この実習生に保育を説明する経験は、同僚に的確に保育の報告、相談をしたり、保護者に保育を説明し理解を得たりする力となる。

#### (2) 学生の前向きさに刺激を受ける

また、学生の前向きな態度、一人一人の子どもに丁寧に関わる姿勢に影響を受け、自らの保育を見直したり、自分と異なる視点で記述された日誌から新たな気づきを得たりしている。ベテラン保育士も、実習生の不安や緊張を受け止める中で、初心を思い出して保育に臨んでいたり、実習生のロールモデルとして努力する態度が生じていたり、保育者としてのモチベーションに変化が見られた。

#### (3) 全職員の連携が図れる

実習生の指導には、担当保育者だけでなく、園長をはじめとする全職員が携わっている。とりわけ若手保育者は、実習生の指導に関して同僚に相談することも多いため、実習指導の相談をすることが自分の保育を見直す機会となることはもちろん、全職員の気持ちがまとまる機会にもなっているようだ。

実習指導の経験を保育の質向上に繋げるためには、園長をはじめとする保育者同士の実習に関する話し合いの場が不可欠であるといえる。

### 4-2. 幼稚園・保育園実習における大学の役割

#### (1) 保育現場と実習生を繋ぐ

アンケートでは、実習日誌の指導における重要なポイントとして、「保育の中からの気づき(89.7%)」が第一に挙げられており、「環境や遊びの捉え方」が次に続いている。インタビューにおいても、「保育者の対応や工夫に気づいてほしい」との意見は多く、保育者の行為の意図や、保育の環境や遊びの意義に気づかせることが実習指導では重視されている。しかし、「わかっているようなそぶりは見えるが、保育者の意図を理解できていな

い」「指導するとすぐに泣いてしまう」といった学生の実態もあり、保育者が指導に苦心している姿も見えてくる。

そこで、保育現場と実習生を繋ぐ役割を果たすため、調査結果を踏まえ、大学教員が実習生の行う保育を見学するだけでなく、反省会にも参加して意見交換を行った。そこでは、大学教員が実習生の気づいていない保育者の意図を言葉にして気づかせたり、緊張し、自分が出し切れていない実習生の長所を保育者に伝えたりしたことで、実習指導の支援が可能となった。明星大学では、実習事前学習「インターンシップ」と実習との指導上のねらいを区別する等、日野市内の大学ごとに本研究で明らかになった課題の解決に向け、連携の在り方を探っているところである。

#### (2) 事前指導の内容を改善する

今回のアンケートは、現場の声を的確に反映できるよう、保育園長らが中心となって作成したが、「実習に臨む姿(87.5%)」が最も重視され、次いで「礼儀」「身だしなみ」となっているアンケート結果からも、保育者は、実習への意欲の高い実習生、社会人としてのマナーを身に付けた実習生を求めていることがわかった。

短大生の調査データではあるが、保育者としての効力感は、2年次5月の保育園実習後において低下し、2年次9月の幼稚園実習後に増加するというデータもある<sup>13</sup>。子どもと関わる経験が減少している実習生にとって、限られた実習期間での経験だけでは子どもとの関わり方を修得することができず、保育者としての効力感を失いやすい。実習の事前、事後を通して、ボランティア等を通して子どもと関わる経験を積み上げること、保育職への志向性を高めることも大学の使命といえる。

また、本学では「礼法」等、社会人としてのマナーや言葉遣いについて指導を行っており、幼稚園、保育園からもマナーに関しては高評価を得ることも多いが、引き続き、保育現場の求めに見合った指導が必要である。

更に、実習前に大学で修得しておくべき内容として、「教材研究力に加え、教材を活用する応用力をつけること」「実習日誌や指導案を書くための視点をもてること」がある。この点に関しては、事前指導の改善内容として、今後の課題とし、研究を継続したい。

## 5. 終わりに

日野市内の公立幼稚園・保育園と大学とは望ましい形で連携を図れる環境にある。今回明らかになった課題(特に事前指導の在り方)を改善し、日野市内の保育現場と大学とが連携を図りながら実習指導を行い、保育の質向上に貢献したいと考えている。



## 謝辞

本研究は、下記の方々に多大な研究協力を得ました。心より感謝申し上げます。

日野市立第二幼稚園 小宮広子園長

日野市立第五幼稚園 比留間千草園長

日野市立みさわ保育園 島崎佳美園長

日野市立あさひがおか保育園 深澤幸子園長

## 注)

生活文化学科幼児保育専攻の学生は、保育園での 2 週間にわたる保育実習を 2 回 (3 年次 6 月と 4 年次 9 月)、幼稚園での 4 週間にわたる教育実習を 1 回 (4 年次 6 月) 実施している。なお、「保育所」が正式名称であるが、本稿では、日野市内で使用される名称に従い、「保育園」と表記している。

## 参考文献

- 1 文部科学省：幼稚園教育要領 (2017)
- 厚生労働省：保育所保育指針 (2017)
- 内閣府：幼保連携型認定こども園教育・保育要領 (2017)
- 2 本研究の内容の一部は、日本保育学会第 71 回大会自主シンポジウム (2018) にて発表を行った。  
保育者の「実習指導力」を育て、保育の質向上を図る  
—保育現場と養成校との連携—  
企画・司会 井口眞美, 話題提供者 井上宏子, 山下晶子, 小宮広子, 比留間千草
- 3 朝木徹：実習生が保育現場から求められる保育技術の検討—保育所実習 I における縦断的調査を通して—, 日本教育心理学学会第 54 回総会, 328 (2012)
- 4 田爪宏二：保育実習における不安と保育(者)観の変化におよぼす保育者効力感の効果 —4 年制大学における実習の進行による変化—, 日本教育心理学学会大 57 回総会論文集, 338 (2015)
- 5 全国保育士養成協議会編：保育実習指導のガイドライン ver. IV, 35-38 (2018)
- 6 民秋言：保育者のための自己評価チェックリスト 保育者の専門性の向上と園内研修の充実のために, 萌文書林, 5 (2015)
- 7 厚生労働省：保育所保育指針 (2017)
- 8 西坂小百合, 森下葉子：保育者アイデンティティの形成過程 —保育実践経験 5～10 年の幼稚園教諭に対するインタビュー調査から—, 立教女学院短期大学紀要, 51 (2009)
- 9 井口眞美：保育者養成校における実習日誌に関する指導法の研究 —幼稚園実習日誌に用いられる“時制”についての調査から—, 淑徳短期大学研究紀要第 51 集, 111 (2012)
- 10 金攻志：新人保育者による省察の意味とその変容を支える支援のあり方—保育実践後の「保育者間の話し合い(対話)」の中から—, 日本保育学会「保育学研究」第 47 巻第 1 号, 77 (2009)
- 11 鈴木隆：幼稚園教育実習のあり方について —実習調査から読み取る実習の実態—, 立教女学院短期大学紀要第 48 号, 79 (2017)
- 12 谷川夏実：幼稚園実習におけるリアリティ・ショックと保育に関する認識の変容, 保育学研究第 48 巻第 2 号, 97 (2010)
- 13 三木知子, 桜井茂男：保育専攻短大生の保育者効力感の変化について, 日本教育心理学学会第 58 回総会論文集, 344 (2016)